

出題傾向

大問数8、問題数45で、すべて4肢択一の選択問題となっている。内容は、会話文問題1問（小問10）、整序英作文問題1問（小問5）、中文空所補充問題2問（小問10）、文法・語法・語彙問題3問（小問15）、長文読解総合問題1問（小問5）という構成である。小問数としては、中・長文及び会話文問題が、文法・英作文問題を上回っている。本学が、文法や語彙などの個別の英語知識よりも、英文の中で文法や語彙などの知識を有機的に使えるかどうか、つまり生きた英語力が身につけているかどうかをより重視していることがうかがえる。全体として難易度は高くないものの、問題数も多く、英文の量もかなり多いので、様々な問題形式をスピーディーにこなせる柔軟な英語力を身につけておきたい。

学習対策

本学の各問題形式に対するさらに細かい分析をした上で、その対策を考えていこう。

●会話文問題

会話文問題は、大問1の中に、A問題、B問題が用意され、それぞれの会話文に対して適文補充が3問、内容に関する設問が2問という構成になっている。会話文はやや長めで、2人の間の会話になっているが、会話の中に他の登場人物も出てくるので、登場人物の関係をきちんと理解して読み進む必要がある。また、会話特有の表現を知らないといえられない問題も含まれるので、日頃より注意して様々な会話表現を勉強しておきたい。

対策としては、紙の上での会話文問題演習だけでなく、Listening教材を用意し、耳から入る会話文で演習することを勧める。会話は基本的には目で読むものではなく耳から入るものなので、耳から入ったものを、後で、目で確かめる勉強法が最適と言える。教材としては、センター試験のListening問題や、英検準2級・2級用のListening問題が使える。

●文法・語法問題、整序作文問題

本学では、文法・語法・語彙・イディオム問題が大問にして3問出題されている。日本文に相当する英文を完成させる語句選択問題、イディオム問題、文法・語法問題の3問だが、純粋な文法問題は少ない。また、整序英作文問題は、日本文が与えられた上で、英文中の4語を並べ替えて英文を完成させる問題になっている。不要な語はなく、語群に与えられた全てを使う問題なので、扱いやすい。

対策としては、整序英作文を含む標準的な文法問題集（解説が詳しいものがよい）を用意し、まず、1回目は時間をかけて、答えを見ても理解できないときは文法参考書や辞書でじっくり確かめながら演習し、2回目以降は徐々にスピードを増しながら、間違った点はノートにまとめるなどして繰り返し勉強しよう。また、イディオムの出題は本学では比重が高いため、解説で紹介される同義のイディオムや反対の意味のイディオムも含めて確実に覚えておこう。

●長文問題

長文問題といっても、本格的な長文問題は1問だけで、もう1問は200～300語レベルの中文である。設問形式は、空所補充問題と、内容に関する英問英答問題及び日本語の問題に対して日本語で答える問題がある。比率としては空所補充問題が全体の約3分の2を占めており、文脈を追いながら適切な語句を選択できる英語力が問われている。

対策としては、日本語訳を前提とした、文法や語法を重視する精読的な勉強よりも、ある程度のスピードで段落ごとに文脈を追いながら英文を理解していく、速読的な勉強が必要となる。推薦する勉強法は音読である。音読する場合、後ろに戻って英文を見直すことはできないので、自然と細かい文法や語法を意識せずに前に読み進む意識が芽生え、どこで息継ぎをするべきか考えることで、英文を意味のまとまりごとに捉える習慣が身につく。もちろん辞書は使わないので、音読する中で、意味のわからない単語でも文脈の中で何とか理解しようとする姿勢も生まれてくる。教科書であれ、過去問等の読解問題であれ、新たな英文に接するときは、まず声に出しながらある程度の意味が分かるまで通読し、その上で今度は辞書を活用しながら精読を行うとよい。そうすることによってバランスの取れた読解力が身につくはずだ。

英語は、基本的には勉強にかけた時間と身につく実力が確実に比例する科目である。自分の現状を知り、効果的な方法で勉強を継続すれば必ず報われるはずだ。まず現在の自分の実力を、これまでの勉強量や勉強法から客観的に認識し、その上で自分の勉強のタイムテーブルを作ってもらいたい。それを地道にこなしていくことで、必ず合格への道が開けるはずである。

出題傾向

大問三題で、大問㉑と大問㉒は1500字程度の随筆的な文章の読解問題、大問㉓が文の整序問題と語彙問題という構成である。それぞれ8～10問の小問があり、すべて4肢択一式の選択問題で、合計30の問題数である。問題文が短く内容的にわかりやすいものであることや、設問が基本的なものであることから、全体的には易しいレベルといえる。国語の基礎力を測ることを主眼に置いた出題傾向である。大問ごとの特徴は以下のとおりである。

大問㉑は、水村美苗『日本語で読むということ』からの問題文である。筆者の文学観が具体例に沿って述べられた文章で、適語の空欄補充を中心とした読解問題となっている。傍線部の理由説明や内容説明に関しても、選択肢は語句や短文であるのが特徴である。作家名を問う国語常識の問題も出題されている。

大問㉒は、吉田尚記『なぜ、この人と話をすると楽になるのか』からの問題文である。コミュニケーション・ゲームをテーマにした、読者に語りかけるような文章で、傍線部で述べられていることの内容説明を求める形の読解問題が中心であるが、表現に関する問題も出題されているのが特徴として挙げられる。訓読みの漢字問題も2問出題されているが、音読みしたときにその漢字が用いられる熟語を選ぶ問題形式となっている。

大問㉓は、文を論理に即して並べ替えて文章を完成する問題と、漢字の正しい読み書きや言葉の使い方、外来語の意味・用法、敬語の正しい使い方を問う語彙問題からなる。ほとんどの設問が「適切でない」ものを選ぶ形式であるということが特徴として挙げられる。

学習対策

語彙問題のウェイトが高いため、まずは漢字と語句の問題集を使って演習を重ねよう。出題形式は選択式であるが、漢字の書き取りが正確にできるように、実際に書いて学習するのがよい。漢字の読み書きができるようになると、その意味を理解して言葉を正確に使いこなすことができるようになる。特に大問㉓の語彙問題では誤字や誤用が問われているので、その対策としては、漢字を語彙として捉え、その意味を文脈のなかで覚えるようにすることが必要である。漢字力は語彙力であり、語彙力は読解力の基礎になるものでもあるので、まずしっかりと漢字学習に取り組んでほしい。なお、外来語に関する問題も出題されているので、日ごろから外来語にも注意して、辞書などで正しい意味を確認しておきたい。また、敬語の正しい用法も問われているので、実用国語向けの問題集も仕上げておくとよい。

読解問題の対策は、上に述べたような語彙力をしっかり身につけた上で取り組みたい。まず、基本レベルの問題集で問題文を正確に読む練習から始めるとよい。段落ごとの要点を捉え、段落と段落の関係を捉え、全体がどのように構成されているのかを見極めて、100字要約をするという練習を積み重ねていくとよいだろう。文章を正確に読み解くことができれば、設問に答えるのは難しいことではない。正解選択肢を見分けるためには、筆者が述べている文中の言葉のなかに根拠を探するという練習が有効である。また同時に、誤選択肢の誤りの箇所を指摘する練習をしていくとよいだろう。もちろん、問題意識をもち、幅広く読書して人間や社会に対する思索を深めておくことも大切である。

国語力を鍛えることは思考力を伸ばすことにつながる。国語力は思考力でもある。それだけに国語力を鍛えるための近道はない。遠回りをしてもじっくり取り組んでいくことが、力を確実に身につけていく方法なのである。